

19	安城	桜井中学校	イシカワ ケイスケ
			名前 石川 敬 祐

分科会番号	1	分科会名	国語教育 (作文その他)
-------	---	------	--------------

研究題目 「場面の様子や登場人物の心情を豊かに表現することのできる生徒の育成—文章を評価し、課題の解決策を見つける活動を通して—」

### 1 主題設定の理由

本学級の生徒は、作文が苦手である。生徒の書いた作文を読むと、同じ内容を繰り返しているものや、誰と、どんなことをしたのかが具体的に書かれておらず、場面の状況がイメージできないもの、自分がしたことや出来事が淡々と書かれているだけのものが多かった。さらに、教師が、アドバイスを求めに来た生徒に「このとき、この人はどのような様子だったのか。」「このとき、この人はどんな気持ちだったと思うか。」と聞くと、「うまく説明できない。」と答えたり、「悲しい。」「うれしい。」と単純に答えたりする生徒が多くいた。このような現状から、生徒の、文章を書く活動における問題点は以下の2つであると考えられる。

- ①どのような場面や雰囲気であったか、登場人物の心情がどのようなものであったかを細かく理解できていない。
- ②場面の様子や登場人物の心情を、どのように表現すればよいのか分からない。

そこで、本実践ではこれらの問題点を解決し、場面の様子や登場人物の心情を豊かに表現できる生徒を育てたいと考え、目指す生徒像を以下のように設定した。

〈目指す生徒の姿〉

場面の様子や登場人物の心情を豊かに表現することのできる生徒

### 2 研究の構想

#### (1) 研究の仮説

##### 【仮説1】

「先生の書いた文章を評価し、よりよくする」という目標をもって学びを進めるように単元を構想すれば、生徒は単元を通して、物語における登場人物の心情や場面の様子を正確に捉え、捉えたことを豊かに表現することができるようになるのではないか。

他人の文章の良し悪しを評価し、課題を見つけるためには、書かれている場面の様子や登場人物の心情を正確に把握することが必要である。また、その課題の解決策を出すためには、場

面の様子や登場人物の心情を豊かに表現するために、どのような表現技法を用いればよいのかを理解し、適切に使用する「書く力」が必要であると考えた。そこで、「先生の書いた文章を評価し、魅力的な文章に直そう」という課題で単元を構想する。生徒は単元の中で「魅力的な文章とは何か」を考え、どのように文章を修正すれば魅力的な文章になるのかを追究できるはずである。

#### 【仮説 1 - 1】

漫画を教材として授業を進めれば、生徒は物語における登場人物の心情や場面の様子を正確に捉えることができるようになるのではないか。

漫画には、登場人物の表情やセリフ、コマの視点（アングルや遠近）の違いといった、言語や画像から、場面の状況や雰囲気、登場人物の心情を読み取りやすいという教材性がある。コマやセリフの一つ一つに着目し、その意味を深く読み取ることで、生徒の「読み取る力」を育てたい。

#### 【仮説 1 - 2】

漫画のノベライズ（人気漫画やアニメ、映画を小説化したもの）作品を参考にして書く活動をすれば、生徒は漫画で読み取った登場人物の心情や場面の様子をどのように表現したらよいのか理解できるようになるのではないか。

ノベライズ作品にみられる表現技法を見本としたり、生徒自らもノベライズ作品を書く活動をしたりすることで、人物の心情や場面の様子を表現する力を身に付けることができると考えた。また、漫画のワンシーンを題材としてノベライズ作品を書くことで、全員が、どのような場面を言語化しているのかを共有して書く活動をすることができる。そうすることで生徒は、他の生徒と自分の文章を比較しやすくなり、自分の参考にすべき表現技法を見つけやすくなるはずである。

#### (2)教材について

本単元では、漫画『鬼滅の刃』とそのノベライズ小説を教材として授業を進めることとした。中学生にとって、漫画やアニメといったサブカルチャーは生活の一部となっている。特に『鬼滅の刃』はアニメ化、映画化もされた人気作品であり、生徒の認知度も高い。漫画の中では、登場人物を写す視点（アングルや遠近）が変化したり、登場人物の心情が表情で分かるような工夫がされていたりする。そのため、生徒にとって、登場人物の心情や場面が分かりやすい作品である。そのような漫画を題材にすれば、生徒の学習に対する意欲を引き出し、「読み取る力」を高められると考えた。また、『鬼滅の刃』のノベライズ作品は他のノベライズ作品と比べて、場面の様子や登場人物の心情が詳細に書かれているという特徴がある。そして、それらを表現するために比喻や倒置、言葉の繰り返しなどの表現技法が多く使用されている。そのような作品を教材として授業を進めれば、漫画から読み取ったことがノベライズ作品ではどう表現されているかを参考に、「書く力」を高められるのではないだろうか。

(3) 単元構想図



### 3 研究の実践



資料 1 生徒に提示したノベライズのページ（鬼滅の刃第一巻より）

第6時のはじめには、資料1の場面について教師が考えた文章を提示した（資料2）。この文章は、これまでの学習で生徒から出てきた意見を踏まえて書いたものであり、比喻表現を多く用いたり、文を付け足すことによって場面の状況を詳しく説明したりしている。しかし、文章を読んで違和感を覚える生徒は多く、「場面の子を詳しく説明する場所がおかしい。」「比喻表現や文章の繰り返しは使われているが、使っている場所がおかしい。」「登場人物の気持ち（どうしたんだろう？という箇所）は本当にこれであっているのか。」といった意見が出てきた。そこで教師は、「なぜこれまで学んできたことが反映されている文章にも関わらず、違和感を覚えるのか。」と問いかけた。生徒からは様々な意見が出てきた。そこで、先生の文章をどのように直せば、違和感なく読めるような文章になるのかについてグループで話し合う時間を設けた。話し合いから出てきた意見をまとめた後、教師が、「自分のノベライズ作品はどうか。今まとめたことが、自分の文章ではできていると思うか。」と生徒に問いかけた。生徒からは、「自分の文章も分かりづらい表現になっている。」「比喻をたくさん使いすぎていて、どこを強調したいのか分からない。」という声が上がった。そこで、自分の文章を見直すための話し合いの時間を設けた。自分たちの文章を読み合い、アドバイスをしあう生徒の姿が見られた。

「頑張れ、禰豆子」  
「こらえる、頑張ってくれ」  
ふとんみたいにおおいかぶさる禰豆子に、炭治郎が絶叫マシンに乗っているように叫んだ。  
「鬼なんかになるな」  
「しっかりするんだ」  
「頑張れ」  
炭治郎は必死に禰豆子に呼びかける。  
「頑張れ！」  
炭治郎は斧（おの）を手に持ち、襲ってくる禰豆子を防ぎ、押し返す——押し返す。  
禰豆子の髪の毛には髪飾りがついている。髪の毛の色は黒い。着物には縁が入っている。歯は犬のよう  
に鋭い。  
急に禰豆子が泣き出した。  
降りしきる雪の中、炭治郎も涙を流した。

資料 2 生徒に提示した、教師の書いた文章

### 4 研究の成果

#### 【仮説1-1】について

第3時には、漫画のどこに着目して読めば登場人物の心情や場面の様子が把握できるかを考えた。生徒は、漫画の一コマコマに着目し、登場人物の吹き出しの形やアングル、遠近といった表現の違いに注目することで、登場人物の心情や場面の様子、雰囲気把握できることに気付いた。





フをそのまま書いただけの文が多い。文末も「言う。」「言った。」「思った。」というように、どのように言ったのか、どのように思ったのかが具体的に書かれていない箇所がほとんどである。対して第6時のノベライズ作品では、「おおいかぶさるように」や「あと少しだ。禰豆子、頑張れ、頑張るんだ。」のように、登場人物の動きが比喻を用いて表現されていたり、場面を解釈して文が書き足されていたりしている（前頁資料3）。单元の中で学んだことを生かして、場面の様子や登場人物の心情をより具体的に、読み手にイメージしやすいように文章を書くことができていることが分かる。

#### 【仮説1】について

第1時で教師の書いた文章を提示した際、「先生の文章がよくないのは分かるが、どこが悪いのかは説明できない。」と発言する生徒が多くいた。ワークシートを見ると、修正をしている部分はほとんどなく、どこをどう直したらよいかを理解できていない様子が見られた。しかし、第6時に記入したワークシートでは「先生の文章は比喻が時代に合っていない。」「この表現は詳しく書かなくてもよい。」などと具体的に文章を修正できていた。单元の中で、文章の違和感の理由は何か、どう修正すればよいかを自分の中で明確にし、言語化できるようになったことが分かる。

また、生徒が書いた第2時のノベライズ作品は、単調かつ抽象的な表現であるのに対して、第6時のノベライズ作品は、比喻や文の繰り返しを適切に使用したり、登場人物の心情を具体的に表す文を付け足したりしている。このように生徒の文章には大きな変化が見られた。

#### 5 課題と反省

本実践では、ノベライズ作品を書く活動において、比喻や単語の繰り返しなどの表現技法を用いた作文が見られた。ただ、生徒の中には、自分の考えた登場人物の心情や場面の様子を、詳しく描写することができていない子もいた。その克服のため、第6時では他の生徒の作品を読み、自分の文章に生かす活動を行った。しかし、他の生徒の作品を読んでも、その作品のよいところを自分の文章に生かすことができていない生徒もいた。これは、他の生徒の作品を読んだ際に、よいと思った表現方法や文章の書き方を「真似してはいけない。」と覚えてしまったからではないだろうか。文章を書く活動において、他人と同じ表現をしてはいけないという考えがあるからこそ、参考にすることができなかつたのだと推測する。読み合う活動を行う際に、他の生徒のよいところを自分の作品に取り入れ、生かすためには、生徒のそのような意識をなくすことが必要であったと感じた。また、本実践では漫画とそのノベライズ作品を用い、書く活動を行った。今回の実践が生活作文等の、他の書く活動に生きてくるかどうかを確かめるためには、他の单元での追研究が必要であると考えられる。書く活動での单元だけでなく、物語文における单元でも、検証を重ねていきたい。